

数年前、ある大学のキャンパスを訪れたとき、学生駐輪場周辺の通路に、面白い立て看板があったんです。そこに書かれていた言葉は、

「ランナー注意！」

陸上部のランナーに注意しなさいという意味です。高速道路や山間部などの道路でも、「動物注意！」などと事故防止の喚起と動物愛護を促す標識を目にしますが、そんな感じの立て看板です。どこの大学だと思いますか？

青山学院大学です。今では駅伝の強豪校ですよね。この立て看板を見て私はほっこりした気分になったんです。限られた練習環境で、懸命に練習をする大切な選手たちを、周囲の人間が自転車などで怪我させてはならない。駐輪場周辺は公共の場所ではあるが、ここは陸上部に一步譲って、大学全体で応援していきましょうという、心の広い大らかな雰囲気伝わってきたのです。だからあんなに強くなっているのかもしれないね。

一方、私が前任校で教頭時代に受けた苦情の電話の中で、「おたくの学校の部活生が、公園で走っていて危ない」というものがありました。もし、その部活動生たちが走りながら周囲の方々に危害を加えたり、不快な思いをさせた部分があるならば、そこは丁重にお詫びをし、今後は周囲に迷惑をかけないように注意しながら練習してくださいと、私は顧問の先生にお願いしました。しかし、様々な目的を持った人が集う公共の憩いの場所で、ただ走っていたというのであれば、何をもって苦情の対象になるのか理解に苦しむ部分が残りました。ここではっきりとわかるのは、「走る」という行為に対する見方が、青山学院大学とは真逆であるということですね。同じ行為を許容できる人とできない人が世の中には混在している、心の広さ、大らかさにもかなりの開きがあるということを、我々は知っておいたほうが安全ということなのでしょう。

それにしても、昨今の日本人はコロナ禍で心がギスギスし過ぎたのか知りませんが、心の狭いクレイマーが多くなった気がします。自分の自宅横の公園で遊ぶ子どもたちの声がうるさいからと公園を閉鎖に追い込んだり。公共のトイレで順番待ちをしているときに、後ろで漏らしそうな子どもがいたので、その子を先に行かせたら、それに対して大の大人が文句を言ったり。電車の車内などで、なかなか泣き止まない赤ちゃんを必死にあやしている母親に、舌打ちをしたり心ない言葉を浴びせたりと、この手の話は今の日本には結構あるんです。

私は子どもや若者に寛容な心を持ってない社会は、いずれ硬直し自分の利益にしか関心のない内向きで閉鎖的な住みづらい社会になると思っています。江戸末期から明治初期にかけて日本を訪れた欧米人の手記や書簡を素材にして書かれた、渡辺京二の『逝きし世の面影』という本の第10章『子どもの楽園』の中には、今の日本とは全く異なる次のような記述があります。

「私は日本が子供の天国であることをくりかえさざるを得ない。世界中で日本ほど、子供が親切に取り扱われ、そして子供のために深い注意が払われる国はない。ニコニコしている所から判断すると、子供達は朝から晩まで幸福であるらしい」

外国人からこのように羨ましがられる時代が日本にあったということを、これからの時代を作っていく皆さんは知っておいた方がいいでしょう。将来、皆さん自身が子育てをする際の道しるべにもなるかもしれません。このような日本の特徴は、経済力を示すGDPやOECD各国の生徒の学力を測るPISAなどには表れない誇るべきものだったのです。こういう特徴を取り戻すために、自分がどのような大人に成長すればいいのか、子どもを含めた周囲の人に幸福感を与えるにはどうすればいいのかを考えることは、皆さん方若者の重要な役割の一つになると私は思っています。そうしないと、ますます進むボーダーレス社会で、多様な文化や経歴を持った人たちと折り合いをつけながら、うまく付き合っていくことなんて到底出来ないと思うからです。

そこで私は、皆さんには「人間力」の「世界偏差値」を高めて欲しいと思っています。「偏差値」といえば普通、「学力偏差値」ですよね。皆さんにとっては、あまり楽しめる数値ではないかもしれませんが。ただ、「学力偏差値」といっても普段皆さんが気にしている数値は、体育や芸術、家庭科などは含まれていない、自分の志望校に必要な教科科目の「偏差値」で、ごく一部の力しか表していないということ忘れてはなりません。これらの数値も大事な「人間力」の一部ではあるのですが、これだけでその人の価値が全て決まるわけではない。私がいう「人間力」とは、学校で教えられる全ての教科の力はもちろん、それ以外に社会の常識、礼儀、誠実さ、忍耐力、決断力、交渉力、積極性、協調性、包容力、共感力、優しさ、思いやり、コミュニケーション能力など、人間が社会生活を営む上で必要となる様々な能力を合わせたトータルとしての人間の力です。例えば学力偏差値が75あったとしても、他の「人間力」の数々の項目が40しかなければ、トータルとしての「人間力偏差値」は軽く50を切ってしまうということです。逆に「学力偏差値」が平均値50ぐらいでも、その他の項目が75ぐらいあれば、トータルとしての「人間力偏差値」は70を超えてくる。この「人間力偏差値」を国内尺度の「全国偏差値」ではなく、国を超えた世界レベルの「世界偏差値」で高めて欲しいという訳です。

今年に入って早々、日本では他国の「人間力世界偏差値」の高い人たちから恩恵を受けていますね。能登半島地震が発生してすぐ、多くの国から支援や義援金の申し出がありました。お隣台湾の義援金は1ヶ月ほどで25億円を超えたといいますし、在日トルコ人の方々が「トルコ地震の恩返しに」と石川県珠洲市で炊き出しを行ったというニュースなどを見れば、人の痛みを感じられる共感力や優しさ、即行動に移す決断力や複数の人で取り組む協調性などの高さが感じられます。このような「人間力世界偏差値」を皆さんにも高めてもらいたいのです。

「人間力世界偏差値」を高めるには、国同士での援助の歴史も知っておいたほうがいいでしょう。例えば、先程も紹介した日本とトルコの関係です。

1890年、オスマン帝国最初の親善訪日使節団を乗せた軍艦「エルトゥール号」がその帰路の途中、和歌山県沖で海難事故を起こし、座礁して大破してしまっています。500名以上の犠牲者が出るこの大惨事の中、地元住民による献身的な救助活動が行われ、台風の影響で残りわずかな蓄えにもかかわらず、食糧や衣類も提供されます。そのおかげで69名の命が救われ無事トルコに帰還することができました。この出来事によりこの地で結ばれた絆は、トルコの人々の心に深く刻まれていきます。

それから約1世紀後、1985年のイラン・イラク戦争で、サダム・フセインがイラン上空航空機の無差別攻撃を宣言し、緊張が高まります。この宣言後、イラン在住の自国民救出の為、各国は救援機を飛ばし次々とイランから脱出させます。しかし、日本政府は救援機を飛ばすことが危険と判断し救助要請に応えなかったのです。テヘランに残された日本人は215人。誰も助けに來ない危機的状況に陥り、絶望の淵に立たされます。この状況を打開すべく、日本大使館がトルコへ日本人救出を依頼したところ、トルコ首相は、それを快く承諾します。まだ500人近くのトルコ人がテヘランに残っていたにも関わらず、日本人に優先的に飛行機の席を譲ったのです。政治的な判断だったとはいえ、実際に飛行機の席を譲ってくれたのは一般のトルコ国民です。このような恩は日本人として忘れてはいけないと思うのです。この出来事は映画化され、『海難1890』として上映されました。興味がある人はDVDで見てください。

「人間力世界偏差値」のイメージが湧きましたか。ちなみに、日本人に飛行機の席を譲ってくれたトルコの方々は、陸路でイランを脱出したようです。自分への危険を顧みず、窮地に陥っている他国の人間を優先したトルコの方々の「人間力世界偏差値」は、私の評価では80としましたがいかがでしょうか。

「ランナー注意！」の立て看板の話から、ずいぶんと脱線して大きな話になってしまいました。物事は全てつながっているということを理解してもらえると幸いです。何はともあれ、「人間力世界偏差値」を高めるためにはまず、「人間力校内偏差値」を高めることが先です。学習や部活動、探究活動やボランティア等を頑張りながら、毎日の生活で接する友達や先生、家族はもちろんのこと、家庭や学校外で出会う地域の方や観光をしている方など、全ての人たちに対しての接し方一つで、自分の「人間力偏差値」は大きく変化します。これを常に意識してみれば、自分の存在価値を少しずつ理解できるのではないのでしょうか。